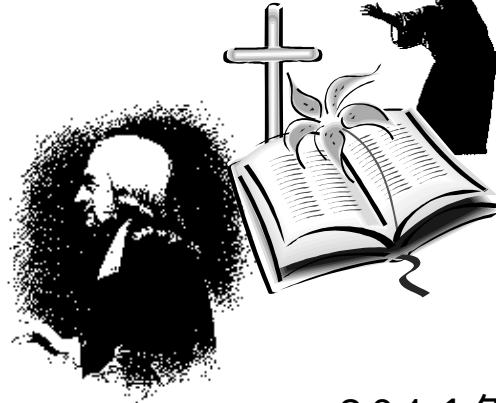


2011.11.27 聖別会

IMMANUEL

インマヌエル
中目黒キリスト教会
聖別会マンスリー



2011年

岩上敬人著「パウロの生涯と聖化の神学」

<ローマ書における聖化の教え> 「からだは聖霊の宮」

テキスト：

「あなたがたのからだは、あなたがたのうちに住まれる、神から受けた聖霊の宮であり、あなたがたは、もはや自分自身のものではないことを、知らないのですか。あなたがたは、代価を払って買い取られたのです。ですから自分のからだをもって、神の栄光を現わしなさい。」
(1コリント6:19 - 20)

A．コリント教会の課題

1．コリントの環境：

異教的影響が強く、そして、その異教の礼拝（女神アフロディテ信仰）は、性的不品行を伴うものであった。

2．コリント教会：

異邦人が主体の教会だったため、キリスト者としてのアイデンティティが未熟で、異教的文化や倫理との線引きが不十分であった。近親相姦の「信徒」の存在がその象徴である。

B．パウロとコリント教会の論点

1．コリント教会の言い分

からだは欲望を満たすためにある。

からだは、自分のものであって、各自、からだを自由に用いることができる。

罪はからだの外で行なわれるものであって、性的不品行は魂に何の影響も与えない。

2 . パウロの言い分

からだは、主の（栄光をあらわす）ためにある。

からだは主のものである。信仰者の自由は、からだの益のために用いるべきである。

性的不品行はからだに対するものである。不品行によって、キリストのからだを遊女と一体化することは許容されない。

3 . からだに対する深い洞察

個人のからだも清く保つのは当然だが、

キリストのからだ（共同体）も清く保つべきである。つまり、聖なる教会共同体内の不品行を許容してはならない。

4 . 神殿としてのからだ

個人のからだに聖霊が宿っている（3：16 - 17も参照）。

教会共同体にも聖霊が宿る。

5 . 聖なる者となる

コリント信徒は立場的に「聖なる者」である（6：11、1：2、30）。

その立場を実質的なものとしなければならない。聖められた事実を思い出し、「聖なる者」としてのアイデンティティを取り戻そう。

終わりに：

腐敗した文化の中で、個人としても、共同体としても聖なる歩みを勝ち取るう